

「博士学位論文提出までの過程」

平成18年3月修了生 **金 範洙**
(東京学芸大学国際戦略推進本部特任准教授)

韓国で大学を卒業し、私費留学生として来日して12年目になる今年の春、ようやく念願の博士学位を取得することができました。私の論文執筆の経験が、海外からの留学生を始め、研究者を目指している連合大学院生の方々に少しでも参考になればという気持ちで、課程修了までの過程をまとめてみたいと思います。

1. 自分を取り巻く研究環境の認識

同じ博士課程に在籍しても、研究分野とテーマ、生活を支えている経済的状況、指導教官との関係など、勉学環境は個人差が大きいと思います。論文作成には、研究に打ちこめる環境を整えることが何より重要ですが、その中身は、個人によって異なってきます。まず、自分の置かれている研究・生活状況を相対化し、それを踏まえたくて生活パターンを単純化することをお勧めします。そうしないと、論文作成に欠かせない十分な考察の時間を確保することが困難になります。とくに、留学生の方々は、日本語ネイティブによる文章チェックが必要になることもありますので、より時間と手間がかかります。私の経験からすると、論文執筆において最も大変だったのは、論文に集中できる時間の確保でした。勉学以外の無駄な時間をなくすために、図書館を「生活の本拠地化」し、時間確保を博士課程における第一の課題として考えました。連合大学院の研究補助制度や外国人留学生対象の奨学制度を有効に活用し、研究を支える経済的収入を補うことができたことが、4年という比較的短い時間で論文を提出できた要因だと思っています。

2. 研究テーマについて

博士論文のテーマである「渡日朝鮮留学生史－留学生政策と留学生運動を中心に－」は、修士論文（旧韓末在日韓国留学生の文明観・国家観－留学生団体の学報を中心に－）の内容をさらに深めるものです。私の場合、先行研究で取り扱われた資料の分析や整理だけで、約2年の時間を要しました。つねに資料を手元に置き、先行研究と照らし合わせて何回も読みつけましたが、それが最終的に通説への問題提起へとつながりました。新資料の発掘作業とともに、先入観に捕らわれず既存資料の分析を行なうことも大事であると思います。日韓両国で教育を受けてきた自分にとって、近代の日本と朝鮮半島をまたがるテーマの設定は、研究対象の様々な観点からの分析に非常に有利に働きました。

3. 論文作成において

博士論文の作成に当たっては、まず、学位論文の提出資格をクリアするために論文投稿を第一の課題とし、博士4年の後期は、博士論文をまとめることに集中しました。研究報告は、論文審査においてあまり考慮の対象にならないと思い、全国規模の大会で年1回のペースで報告することで満足しました。

博士課程1年目は、修士論文の前半部分をまとめて10月の朝鮮学会大会で報告を行いました。また、発表内容をまとめたものを同学会に投稿し、それが博士課程3年時、2004年4月号の『朝鮮学報』に掲載されたことで、学術論文の条件は一応クリアできました。また、博士2年目には指導教官との共同研究で論文と関わる資料集の作成に取り組み、報告書を翌年の7月に刊行しましたが、その成果を博士論文に反映させることで、研究対象に対するより実証的な側面からの考察が可能となりました。

博士4年目の2005年には、連合大学院の『学校教育学研究論文集』（7月投稿）と『日本研究』（韓国、11月投稿）に論文を投稿し、その審査結果を待ちながら学位論文の作成に進みました。かなり厳しい日程でしたが、二つの論文が「修正後掲載」という条件付で掲載が決まり（論文2本は、ともに2006年3月に刊行）、最終的に学位論文も提出できました。

4. 博士学位論文を提出して思うこと

博士論文の提出が近づいてくると、体力・精神の両面ともかなり不安定になりがちです。私は、4年目の10月ごろから深刻な不眠症に悩み、大学の保健センターでカウンセリングや処方を受けることになりました。論文提出後、体調は嘘のように回復してそれ以上お世話になることはなくなりましたが、その間の重圧感は相当重いものでした。同じく博士論文を抱えている友人から、不眠症や鬱の症状に悩むという話はよく耳にしてきましたが、自分がその境遇に会って初めて、そのつらさが理解できたと思います。研究者を目指している人同士は、国、性別、年齢、専門はそれぞれ違って、互いに共通する人生の目標や理想があるはずですが、博士学位論文は、研究者への最後の関門でもあります。目の前にみえる終着点に向かって、ぜひ頑張ってください。

最後に、博士論文の提出までご指導くださった指導教官の方々、そして連合大学院博士課程係の阿久津さんに深く感謝申し上げます。